

## 〔活動報告〕

## 第5回国際家族看護学会報告

山梨県立看護大学

中久喜町子

## 1. はじめに

今年で第5回を数える国際家族看護学会はアメリカ大陸中央よりやや北東、ミシガン湖の南西に位置する都市、イリノイ州シカゴで開催された。シカゴは摩天楼発祥の地としても知られ、また冬の寒さでも有名であるが、今回は夏の寒さも体験した。

7月下旬のシカゴは湿度が日本より低く感じられ、晴れるとからっとした日差しの強さが印象的で、気持ちよく町を歩くことができる。が曇って風が吹くと上着を着ても寒いほどで、「ウー、さむ」といいながらひとりで足が早くなる。そんな中を天気に関係なく、人々は大股で颯爽と歩いていた。学会会場のマリオットダウンタウンホテルはシカゴで最も華やかな通りであるミシガン通りに面し、観光客やショッピングの人々で賑わう地区にある。ロケーション、サービスともに優秀な高級ホテルとして知られる大規模ホテルで、さまざまな学会やイベント、ミーティング会場として利用され、学会期間にも別のミーティングが開催されていた。

## 2. 学会概要

今回の大会の事前参加登録者数は385名であったが、当日参加者を含め最終参加者数は19カ国450人の大規模な学会となった。学会は4日間にわたって、日本人にはなじみのない朝早くから(ちなみにポスターセッションは午前7時スタートであったが、準備のため6時半には会場入りをしていた)夜まで開催され、この日程をこなすには彼らと同じくらい

食べられなければ太刀打ちできないという結論に達した。レストランで出される食事の量は毎回食べきれないほどで、特にシカゴ名物ピッツアは恐ろしい程の大きさと厚さだった。

さて今回の学会の統一テーマは「21世紀の家族看護」で、以下の4つの目標が掲げられていた。

- 1) 家族看護の理論、研究、実践、教育と方策を議論するための国際的枠組みを決めること。
- 2) 家族看護の理論的基盤を強化するために実践と研究についての最新の観点、また歴史的観点について分析すること。
- 3) 世界中の家族が直面している問題の分析や解決のために学際的かつ文化的に多彩な研究方法を用いること。
- 4) 家族看護研究と実践の密接な関係を確認し強化すること。

なお学会の大まかな日程は表1に示すとおりである。以下、プレカンファレンスとオープニングセレモニー、ポスターセッション、シンポジウム、分科会の口演について紹介する。

## 3. プレカンファレンスワークショップとオープニングセレモニー

大会初日のワークショップは5つの会場に分かれ、それぞれ次のテーマで開催された。ワークショップIは「21世紀の家族看護理論と実践」、ワークショップIIは「上級家族看護実践—イルネスビリーフモデル」、ワークショップIIIは「New Millenniumの家族看護の挑戦と機会」、ワークショップIVは「家族に関する研究の方法論的挑戦と解明」、ワークショップV

表1. 第5回国際家看護学会日程(2000.7.19~22)

日	時	項	目
7/19 (水)	8:00-19:00	参加登録	
	9:00-12:00	プレカンファレンスワークショップI	
	9:00-16:30	プレカンファレンスワークショップII・III	
	13:30-16:30	プレカンファレンスワークショップIV・V	
	17:30-20:30	オープニングセレモニー, 開会の辞	
7/20 (木)	8:00-15:00	参加登録	
	7:00-8:30	ポスターセッション	
	9:00-10:00	基調講演	
	10:30-12:00	分科会I(報告とシンポジウム)	
	13:30-15:00	分科会II(報告とシンポジウム)	
	15:30-17:00	分科会III(報告とシンポジウム)	
7/21 (金)	17:30-19:00	特別講演	
	7:00-8:30	ポスターセッション	
	8:45-10:00	基調講演	
	10:30-12:00	分科会IV(報告とシンポジウム)	
	14:00-15:30	分科会V(報告とシンポジウム)	
7/22 (土)	16:00-17:30	分科会VI(報告とシンポジウム)	
	19:00-21:00	バンケット	
	8:30-10:00	分科会VII(報告とシンポジウム)	
	10:45-11:45	閉会の辞	

は「看護用語の標準化のためのグローバルな議論」というテーマであった。

私はカナダカルガリー大学のライト先生, ヘル先生のワークショップIIに参加した。ワークショップIIの目標は以下の通りである。

- 1) 家族システム看護アセスメントとビリーフを明確にし介入について観察する。
- 2) 病気という文脈において家族と個人のビリーフの重要性について理解する。
- 3) 家族システム看護実践のイルネスビリーフモデルを補強する看護者のビリーフを理解する。

当方は大会初日にまだ英語に耳も慣れていない状態で, 英語は頭に留まることもせず, 集中力もすぐに限界に達する状況で悲惨なスタートを切った。それでも使用しているビデオが今年のカルガリー大学のエクスターンシップのライブ版であること, これまでのクリニカルプラクティスモデル(CFAMとCFIM)に加えてイルネスビリーフモデル(IBM)が開発されたことが理解できた。病のビリーフはその社会/文化によるビリーフという土壌の上に家族全員のビリーフ, 患者本人のビリーフ, ケア提供者のビリーフがある部分は重なり, ある部分は重なることなく存在しているというのである。イルネスビリー

フモデルの4つのマクロ的手法が紹介され, 第一にビリーフが変えられる背景を作ること, 第二に病のビリーフを見出し見極めること, 第三に後ろ向きなビリーフを明らかにし変えること, 第四に変化を認めることが提案された。午後のワークショップではこれらについてさらに詳しい説明があった。

その他, 初日の夜のオープニングセレモニーでは, 各国の参加者がそれぞれの国の民族衣装で登場し, 多くの国で家族看護の実践・研究がなされていることが実感できた。日本からの参加者も東京大学の杉下知子先生を中心に浴衣に半幅帯といういでたちで, 日本の家族看護の存在をアピールされていた。

#### 4. ポスターセッション

ポスターセッションは7月20日と21日の二日間にわたって朝7時から8時30分まで開設された。7時の開場に間に合わせるために, 担当者は6時30分頃から会場で準備に取りかかっていた。ポスター掲示の場所は「早い者勝ち」なので, 思い思いの場所を確保していた。ポスターセッション初日の20日には34件, 21日には33件の示説があり, 各グループはポスターに趣向を凝らし日ごろの成果の発表に力を注いでいた。

報告のテーマはあまりにも多様で, 対象の発達段階でも, ケアが行われる場でも, 健康障害の種類でも一表にまとめることが困難なほどであった。そこで日本からの報告に焦点をしばらく紹介する。

日本からの報告は二日間で4件で, 「家族看護における北里大学研究会の研究と実践」と題された報告は不安神経症の妊婦とそのパートナーに対する援助や6カ月の喘息の子どもの父母に対する援助, 肺がんの男性とその家族に対する面接による援助などが報告されていた。「子どもを長期的にケアしている家族のモデルの適合性のテスト」ではハイモービックモデルの日本における, 対象を子どもにした場合のモデルの適合性をテストした結果の報告であった。「自宅で脳卒中の両親をケアしている主な家族介護

表2. 第5回国際家族看護学会シンポジウムのテーマ

テーマ	7/20	7/21	7/22	計
ボスニア 生き残った家族への介入	○			3
慢性疾患を持つ子どもの家族の回復力	○			5
手のかかるベビーと取り乱した家族—子どもの痲癩を扱う治療の試み	○			5
子どもを持つ家族の健康問題	○			5
家族看護ユニットにおける新しいことは?—最近の家族システム理論・実践・研究における発展	○			4
地方のコミュニティにおける家族の健康の回復—21世紀にむけて教育・実践・研究における新しい取り組み	○			3
家族における多文化的研究の測定法	●			6
家族に焦点をあてた小児新生児ケア	○			3
慢性疾患と家族—最近の問題と新しい傾向		○		5
スウェーデン大学における家族に焦点を当てた看護の展開		○		6
シンボリック相互作用と家族理論の創出		○		7
生活と健康の転調—家族の考察		○		3
家族の営みのスタイル—発達と適応		○		6
特別なニーズのある子どものきょうだい		○		4
家族ケアの営み—概念から評価へ		○		5
家族問題としての遺伝—家族プロセスの意図するもの			○	3
●:日本人のシンポジストを含む				合計件数 73

者のケア負担」は主観的な評価と身体的なパラメーターを使った調査報告であった。「ケア環境における患者とケア提供者の関係の変化の分析」については日程が調整できず参加する機会が得られなかった。報告者は英語による活発な質問に対してある時は堂々と、ある時は考え考え答えていた。英語は必需品との思いを強くしたセッションであった。

## 5. シンポジウム

シンポジウムのテーマについては表2に示す通りである。シンポジウムは三日間で16分科会にわかれ、合計73件の報告があった。テーマとして多いものは子どもとその家族に関するもので、次いで理論・実践・研究に関するものが多い。また現代の世界の状況を表すものとして「ボスニアの生き残った家族への介入」というものがあり、構成員の誰かが亡くなった家族が如何に多いか想像させられる。

また今回の学会では統一テーマとして学際的な研究方法が求められたり、多文化的な視点を持った分析や解決策が期待されているが、その期待に添うシンポジウムとして「家族における多文化的測定法」と

いうセッションが、7月20日に設定されていた。このシンポジウムにはシンポジストとして東京大学の法橋尚宏先生が参加されており、「病院に入院している小児に付き添っている家族の家族機能について」報告されている。

報告はアメリカで開発されたFFFSを日本語版に翻訳し、その有効性を検討した上で、開発したFFFS日本語版Iを使用して母親の付き添いが家族に与える影響について述べていた(日本語版FFFSIの開発のプロセスについては家族看護学研究6(1)p2-10参照のこと)。これによって日本における家族機能の測定が可能になり、同じ測定用具を使用して客観的に評価・比較の道が開けたことになる。

## 6. 分科会報告

報告論文については表3に示すとおりである。口演は三日間にわたって42のセッションで、185件の報告があった。そのうち日本からの報告は8件あり、次のようなテーマで報告がなされた。

- 1) 家族看護を学んだ学生の認識の変化
- 2) 家族の認識とケアを受けている患者の評価に

表3. 第5回国際家族看護学会において報告された各論文の分野と件数

テーマ	7/20	7/21	7/22	計
家族状況にリスクのある青年期		○		2
子どもの急性疾患が引き起こす問題と技術援助ケア	●	○		9
家族の経験—慢性疾患小児	○	○	○	11
家族—相互作用と関係	○○			8
家族と遺伝学		○		4
家族と労働		○		2
家族ケア		○		3
高齢者に対する家族ケア	○		○	6
低収入家族の家族機能			○	3
家族政策—分析と発展	○			4
病人に対する家族の反応	○○			7
家族システム看護		○○	○	11
ジェンダーと女性問題	○			4
ケアを受けている家族への援助	●			4
家族の経験—HIV/AIDS	○	○		8
促進的プログラムと介入		○○	○	10
世代間の家族役割と関係	○			3
青年期の健康問題		○	○	8
喪失・悲嘆・死別		○○		8
夫婦と健康・病気の関係		○		4
精神疾患と認識障害		○●		6
家族看護研究の方法論における問題	○●			8
幼児期における子育て問題	○	○		6
専門的問題	●			4
特別なニーズのある子どものきょうだい		○		3
虐待の実態		○		4
家族看護学教育	○●			8
出産後の母親の経験		○		4
ファミリーヘルスと機能の理解と促進	○○			7
親への理解		○	○	7
子どもと家族に対する暴力	○○			6
移民・亡命家族に関する研究		○		3
	合計件数			185

●：日本人の報告者を含む  
 ○○：二会場あったことを示す

関する研究

- 3) 介護者の満足指標—日本の介護者の新しい測定用具の開発
- 4) 入院中の学童期の子どもと母親の適応に影響を及ぼす因子について
- 5) 日本家族看護研究学会の活動について
- 6) 日本における看護専門用語の標準化を妨げる因子について
- 7) ターミナル期の患者にとっての家族の存在の

意味について

- 8) 心身障害の子ども家族に対するサポートプログラム
- 分科会が多すぎて聞きたい報告がなかなか聞けないというもどかしさはあったが、得るものが多い学会であった。国際学会では「ことば」のハンディがあるが、質問する方もゆつくり発音し、急がせずに答えを待っている姿勢が伝わってきた。「英語は道具だ。伝えたい何事かがあれば伝わる」といった人がいた

が、そのことばを実感できた。

## 7. おわりに

第5回国際家族看護学会は次回開催国をボツワナと発表し閉会した。学会中にボツワナの豊かな自然がカラーポスターで紹介され、関心を高めていた。ボツワナはアフリカ大陸の南部に位置し人口153万人、国土面積58万1730平方km、英語、ツワナ語を言語とする国である。ちなみに日本は人口1億2556万人、国土面積37万7836平方kmで、日本の1.5

倍の国土に、日本の82分の1の人が住んでいることになる。3年後には摩天楼から豊かな自然に舞台を移し、実り多い学会が開催されることだろう。

今回の学会参加はなかなか参加が確定せず、早々に予約していたものを取り消し、急遽参加が可能になって北里大学の方々のグループに入れて頂いた。グループの森秀子先生をはじめ、中村由美子さん、松野時子さん、新井陽子さんには学会中はもちろんのこと出発から帰国まで大変お世話になった。報告書を書くことができたのも彼女達のおかげであることを付け加えておきたい。